

熱情と冷静さ

——歌人長塚節は結核をどう生きたか——

松岡 秀明

はじめに

苦しみは時として芸術の母となる。病む当人にとって病いは厭わしいものだが、病いを契機として人はすぐれた芸術を創造してきた。短歌も例外ではない。これまで、さまざまな歌人が自らの病いについて、すなわち彼ないし彼女が経験する精神・身体的苦痛について多くの歌を詠んできた。それらのなかには、人間存在の本質を問いかけるような短歌も含まれている。また、直接病いについて詠まない場合でも、病いを契機として短歌の質がより高くなるということもしばしばある。

以下本稿では「病気」という言葉と「病い」という言葉を使い分けるが、これには理由がある。医療人類学者のヤングは、「病気」(*sickness*)は、個人が経験する状態の「病い」(*illness*)と、医療の専門家が下す診断の「疾病」(*disease*)から形成されているとした(Young 1982)。「病気」について歌を詠む際、一人の人間としての歌人の主観が重要な意味を持つ。

この分析概念を用いると、これまでの病気を主題とした日本の研究の多くは疾病に焦点を合わせてきている。病いに注目して、すなわち個人がどのように病いを生きるかという観点から病気を論じたものは意外に少ない¹⁾。本稿では明治から大正を生きた小説家で歌人の長塚節(1879-1915年)が結核をいかに生きたか、またその際の歌の意味を探っていく。

1. なぜ短歌か

病者の文学としての性格を短歌は持っている。「療養短歌」および「療養俳句」は、文字通り病む人々が療養中に詠む短歌や俳句を意味している。病気としては、結核やハンセン氏が代表的である。

ハンセン氏病で死亡した歌人としては、明石海人（1901-39年）、伊藤保（1901-63年）らがいる²⁾。結核では、正岡子規（1867-1902年）、石川啄木（1886-1912年）、山川登美子（1879-1909年）、前田純孝（1880-1911年）、松倉米吉（1895-1919年）らの歌人が明治大正期に亡くなり、昭和の歌人では、滝沢亘（1925-1966年）、相良宏（1925-1955年）らが斃れている。俳句では、結核の石田波郷（1913-69年）が著名である。

これらの病気の治療は専門の施設で行なわれることが多かったが、そこで短歌や俳句がつくられていった。小説が一定の時間集中しないと書けないのに対し、短詩系文学である短歌や俳句は短時間で詠むことができる³⁾。この手軽さが療養する人たちに受け入れられた要因の一つであった。また、他人の短歌や俳句を読み批評をする集まりが形成され、仲間ができて会が形成され、その会誌が発行されるようになることも決して稀ではなかった。

そこで、病気や病いと短歌について論じる場合、(1)個人と病いの関係、(2)同じ病気と診断された人々がどのように集団を形成するか、という二つの問題関心を設定することができる。本稿では、(1)のアプローチをとる。

短歌・俳句とその作者の関係について、松田修は次のように論じている。

和歌＝短歌、連歌＝俳諧のごとき、短詩型文学のばあい、一首・一句が自立的宇宙であるとしても（あるいはあればあるほどに）、それらを統合する求心的力学として、作家の（作家名の）登場がしばしば要請されるだろう。その点、作品と作家の連帯というか、結合というか短詩型文学におけるかかわりには、小説や物語とはレベルをことにした体質がたしかにある（傍点原文）。実名であれなけれ、すでに固有名詞で作品＝作品集に臨んでいる以上、男性か、女性か、二十歳か、三十歳か、家庭は、子供は……、と踏み込んでゆかざるをえぬことにもなるのだ。（中略）そして踏み込みによって明らかになる部分がたしかにあるのだ（松田 1980: 142）。

松田は、近代以前の和歌や俳諧も射程に入れて論じているが、少なくとも近代以降の短詩型文学においてこの主張は当を得ている。長きに亘って引用したのは、短歌と俳句の短詩型文学では、一首・一句が作品として独立していても、作家の生を知ることによって作品をより深く理解できるようになるというこ

とが端的に指摘されているからである。この説を逆に言えば、短歌や俳句は作家の生をよりいっそうの奥行きをもって把握する導きの糸となりうるということだ。

さて、近代以降の短歌と俳句では重要な差異がある。上田三四二が指摘するように、短歌は主観的で具体的あり、俳句は客観的で抽象的であるということである（上田 1959: 11）。「作中主体」とは、短歌の中の主体である。近現代短歌は基本的に一人称の文学であり、直接歌の中に登場しようとしまいと、この作中主体の存在が読者に強く意識されることになる。ある短歌に二人称の「あなた」や三人称の「彼・彼女」しか登場しなくても、彼らを認識している主体がいるし、叙景歌でもその風景を見ている主体が存在する。この主体が「作中主体」と呼ばれている。そして、作中主体は歌人その人であるのが一般的である。したがって、個人が病いをどのように経験するかを検討する際には、俳句より短歌の方が相応しい。

2. なぜ結核か

ある時代を代表する病気がある。日本では、近代以降まず結核がそのような病気として現われた。そして、国民病と呼ばれた結核を病む歌人は秀れた歌を多く残した。本節では、結核に斃れた歌人たちの短歌を紹介し、その特徴を検討する。長塚節の短歌と比較する対象を示すことで、彼の結核にかかわる短歌の特色をより明確にすることが可能となると考えるからである。その際に、病気とかかわる短歌を以下の五つのカテゴリーに分ける。

- (1)短歌の主題として病気が現われる
- (2)短歌に単語として病気が現われる
- (3)短歌のなかに病気は現われないが、それを想起させる表象が存在する
- (4)詞書のなかにのみ病気が現われるか、あきらかにそれを想起させる表象が存在する
- (5)歌人が病んでいるということが分かると、その歌が病気にかかわると判明する

正岡子規は、結核に斃れた文人のなかでもとりわけ著名である。子規は俳

人として知られ、死の直前の三句「痰一斗糸瓜の水も間にあわず」「糸瓜咲て痰のつまりし仏かな」「痰一斗糸瓜の水も間にあわず」は非常に有名である。しかし、根岸短歌会を主催した子規は短歌もよくした。ここでは結核についての歌を3首引いておく⁴⁾。

瓶にさす藤の花ぶさみじかければ暈の上にとどかざりけり
瓶にさす藤の花ぶさ一ふさはかさねし書の上に垂れたり
くれなゐの^{うばら}薔薇ふふみぬ我が病いやまさるべき時のしるしに

教科書にも採用されている1首めと2首めの歌は、純粋な写生であって心情は表わされてはいない。しかし、子規が病床にあるということを知ると、その心情を想像することができるという点で、作家の生を知ることで作品がより深く理解できるという例証となっている。この2首は、上記の(5)のカテゴリーに入る。

3首めは、結核の症状についての短歌である。「我が病い」とあるので作中主体が病んでいるということは分かるが、その病いが結核であり、重要な症状のひとつとして咯血があるということが知れると、「くれなゐの薔薇」が咯血した血の喩であるということが了解される。(1)のカテゴリーの歌である。この歌は、1901年(M34)5月4日、「しひて筆を執りて」と前置した10首のなかの1首である。この一連は、直接的間接的に自らの病いについて詠んだ歌を集めており、広く知られる「いちはつの花咲きいでて我目には今年ばかりの春行かんとす」も含まれるが、子規らしからぬ鮮烈なイメージを読者に喚起する点で本歌は異色である⁵⁾。ソントグは、結核にはロマンチックなイメージがあると指摘しており(ソントグ[1978]1982)、福田は日本近代でも同様なことがあったと論じている(福田1995)。この歌の薔薇という比喩を、ロマンチックと捉えることもできるだろう。

咯血についての短歌をもう1首、貧困のうちに夭折した松倉米吉の短歌のなかからあげておく。

灯をともすマッチたづねていやせかるる口に血しほはみちてせかるる

この短歌は、(1)のカテゴリーに入る。夜寝ていたら咯血し、その血を口に含

んだままランプを灯すためにマッチを探すというたいへん緊迫した状況が活写されている。咯血は生命の象徴とされていた血液が体の外へ出ていくという点で、死の恐怖や漠然とした不安を惹起する。また、咯血は血液による窒息をきたしうるという点で、危険な症状である。

結核のいま一つの重要な症状として、咳がある。^{いわやばくあい}岩谷莫哀 (1888-1927) は、次の歌を遺している。

隣室の妻は起さじみじか夜の明けなば咳の鎮まるべきか

(1)の歌である。結核を患うゆえに部屋を隔てて眠る妻を思いやる心情が表されている。咳の苦痛は、結核を病む人間のうちに呼吸そのものに対する繊細な感受性を育んでいく。言葉を換えれば、呼吸の困難さと直面せざるを得ない人間だからこそ感得できる呼吸についての鋭敏な研ぎ澄まされた感覚である⁶⁾。死後出版となった石川啄木の『悲しき玩具』(1912 M45) には次の有名な歌が収められている。これは(3)の歌と考えてよいだろう。

呼吸すれば
胸の中にて鳴る音あり
風よりもさびしきその音！

3. 長塚節の咽頭結核発病と歌への回帰

茨城の貧しい農民の生活を描いた長編小説『土』(単行本としては1912年 M45 刊) で知られる長塚節は、すぐれた歌人である。だが、現在ではそのことはあまり知られていない。論を進める前に、1911年 (M44) 11月22日、咽頭結核と診断されるまでの節のあゆみを短歌を中心に概観しておこう⁷⁾。長塚節は、1879年 (M12) 4月3日茨城県岡田郡国生村(現常総市国生)に、父源次郎、母たかの長男として生まれた。この夫婦には後に弟2人、妹2人が生まれ、5人兄弟となる。1889年 (M22)、節は地元の尋常小学校を卒業し、4月から下妻高等小学校に通うために実家を離れ母の実家で暮らした。

1893 年 (M26) 同校を首席で卒業した節は、茨城県尋常中学校 (後に水戸中学校となり、現在は水戸第一高等学校) に入学するが、1896 年 (M29) 4 年生の時に、不眠症となる⁸⁾。結核発症後、この不眠症は節を悩ませることになる。東京で治療するがよくなり、中学を退学する。その後、新聞『日本』で正岡子規を知るとともに、その子規が翌年痛烈に批判する古今集も学んでいる。また、19 歳の時に短歌をつくり始めている。

子規は 1898 年 2 月 12 日から新聞『日本』誌上に 10 回にわたり「歌よみに与ふる書」を連載するが⁹⁾、節もこれも読んでいる。また、節が 20 歳となったこの年から、総合文芸誌『新小説』(1896 年 7 月からの第 2 次のもの) に短歌や小説の投稿を始め、いずれもすぐさま入選している。いかに文学の才に恵まれていたかが理解されるだろう。

1900 年 (M33) 3 月 27 日に、節は根岸庵に初めて子規を訪れる。夏には伊藤左千夫と知り合う。子規が 1902 年 (M35) に没したのち、1903 年 (M36) 伊藤左千夫が創刊した『馬酔木』に参加し、短歌や長歌を発表するとともに、写生文も書くようになる。1908 年 (M41) 『馬酔木』は発展的に『阿羅々木』(翌年『アララギ』と改題) となるが、これにも参加し、短歌などを積極的に発表する。『アララギ』には、伊藤左千夫、節のほか、島木赤彦、斎藤茂吉らが参加している。また、この年から小説も書きはじめる。1909 年 (M43)、東京朝日新聞に『土』を連載する。

1911 年 (M44) 8 月に「唾液を燕むに、ぴりゝと咽頭に痛みを覚え」という病気の予兆があり、10 月には咳が激しくなったため実家近くの医師に診てもらったがはっきりしなかったのであった (12 月 7 日付の福島の知人、門間春雄宛書簡 全集 6: 363)¹⁰⁾。11 月 19 日、近しい友人の岡麓の家を訪れ体調不良を訴えた折¹¹⁾、節は岡に「医者とは胃がわるいのだというが胃ではないようだ」と言い、さらに「咽喉がえからくて困る」と話したという (斎藤 1944: 65)。翌 20 日、岡が同行し、節は日本橋の耳鼻科の木村医師の診察を受ける。木村医師は岡だけを呼び、「もう一度明日丁寧にみるが咽頭結核のやうだ、明日本人に話してよいか。なるべく話してきかせて用心させたいが」と語ったという (同前、66)。これは、当時結核を告知することが、医師にとってもかなりの負担であったことを示す重要なエピソードである。これを聞いた岡は「ひどく驚いた」が、「やはり云つて下さい、然し絶望といふではなしに治療をしてゐたらそれだけ永く保つといふ話もして

下さいと頼んだ」という（同）。

そこで、先述のように節は11月21日に、木村医師から咽頭結核に罹っていることを告げられる。その際、放置すれば、余命は「一年か一年半」と宣告されている（先に引いた12月7日付の門間春雄宛書簡 全集6: 363）。そのため、「流石に小生も数日間は快々として食欲も減退の気味」であったという（同）。また、長塚はこの時のことを平瀬泣崖に「人の通るのも見える、電車の行くのも見える、併しもう、何もかもしいゝんとして一切音がしない」と語っている（平瀬 1915: 149）。

12月5日、節は東京市下谷区中根岸にあった根岸養生院に入院し翌1912年（M45）2月20日まで、78日間の入院生活をおくる。入院直後の12月10日¹²⁾、中村憲吉は、節を見舞った伊藤左千夫に同行して初めて節に会った時の印象を次のように述懐している。

恐しい死病の宣告を受けたあととて、その相貌には病気による衰弱も見えたが激しい精神的動乱と闘つたゝめか一種の凄愴味を帯びてゐた。しかし、それでゐて長塚さんの態度は意外に沈着で活気があつた。（中略）頻りに元気よく語つてゐた。私は死病に面した病人とは思へぬ、その落着いた態度に驚いた（中村 1925: 102）。

たしかに、郷里の父に宛てた12月13日付の葉書にあるように、医師は節に『『あなたのは取り切る見込みですからすつかりよく成る様にとつてしまふ見込みですから』』とは言っている（全集6: 368）。しかし、当時は死病とされていた結核である。節は苦悩していたに間違いはない。そして、この病氣のために茨城の医師の娘黒田てる子との婚約を、節の方から申し出て解消したことも大きな心痛であつたはずである。それは、以下でふれる二つの連作にはつきりと見て取ることができる。

翌1912年（M45）2月、節は『アララギ』第5巻第2号に「我が病」12首を発表する¹³⁾。「咽頭結核といふ恐ろしき病ひにかゝりしに知らでありければ心にも止めざりしを打ち捨ておかば余命は僅かに一年を保つに過ぎざるべしといへばさすがに心はいたくうち騒がれて」という長文の詞書が付された一連であり、次の歌に始まっている。

生き死にも天のまに――と平らけく思ひしたりしは常の時なりし

ここには、突然結核という死病に罹っていると宣告された節の動揺が直截にあらわれている。また、事実をそのまま示した詞書が、歌の背景をはっきりと示している。鹿児島が「この歌は実に研ぎ澄ました落ち着きを持っている」と指摘しているとおり（斎藤 1944: 64）、死の宣告にも等しい結核の診断の後にこのような客観的な歌を詠む節の強い精神力に驚かざるをえない。別に2首を引く。

我が心萎えてあれや街行く人の一人も病めりとも見ず
知らなくてありなむものを一夜ゆゑ心はいまは昨日にも似ず

これらの歌はやや説明的となっているが、結核の診断を受けた者の心理が端的に表現されている。1首めの歌だが、街を歩く人々のなかに病む人がいない訳はなく、病む人は一人もいないように見える、という主観を率直に表現したものである。2首めは、自分の病気を知ってしまった現在の心は昨日の心とは異なっているという主観をこれも直截に詠んだものである。

上田は、この「我が病」の12首一連を「詩人の想像力を極限にまでおしすすめながらなお観念的」と評して、その理由を「死の恐怖を、或は死という難問それ自体を、詩の形象に代置することは到底不可能だからである」としている（上田 1959: 24）。その一方、この一連に感銘を受ける読者がいる。土屋文明は「清麗ではあるがどこかよそよそしく感ぜられる作者の作風に対する不満はここで一掃された様に思ふ」と、それまでの節の短歌と比較してこの一連を高く評価している（斎藤 1944: 65）。また、清水房雄は、この「我が病」と「鍼の如く 其の五」のなかの1914年（T3）9月13日の二首を「節作品の内、最も心をひかれるもの」としている（清水 1984: 308）。

続いて節は、同年4月発行の『アララギ』第5巻第4号に入院中および退院後に詠んだ短歌51首を「病床雑詠」のタイトルで発表する。婚約までこぎつけた女性を諦めざるを得なかった節の心境を示した歌に秀歌があるが、本稿の主題からははずれるので1首だけ引く。「既に五十日にも余りぬれば我が病院生活も半を過ぎたらむと思ふに、待つ人の遂に來らねば徒に思

ひを焦すに過ぎず医術の限を竭して後は病はいかに成り行くべきかと心もこゝろもとなくて、一月廿十三日の夜いたく深くる程に筆をとりて」というこれもまた長い詞書の後の1首である。

我が病いえなばうれし癒えて去なばいづべの方にあが人を待たむ

結核が治癒したとしたらうれしいという単純な表現が、病む人の気持ちを直截に表しているといえるだろう。

詞書に「七十八日の間我を慰めし花は只一株の山茶花に過ぎざりけるを、(中略) 此の花遂に我がためにのみさきつくしけるにこそとさへ思ひいでられて」とあるように、節の入院生活を慰撫したのは、病院の庭の一本の山茶花であった。節はこの山茶花について12首を残している。4首を引くが、これらは詞書から1912年(M45)1月23日から2月20日の退院までの間に詠まれた歌である。

打ち萎え我にも似たる山茶花の凍れる花は見る人もなし
山茶花は萎ていまは凍れども命なる間は豈散らめやも
山茶花のあけの空しく散る花を血にかも散ると思ひ我が見る
山茶花はむなしくなりぬ我が病癒えむと告ぐる言も聞かなくに

1首め。山茶花は枯れるとぼとりと落ちるが、死病の宣告を受けた自らを打ち萎え凍った山茶花にたとえ、見捨てられているという孤独感を表している。2首めに現われる凍った山茶花も自分の喩だが、生ある限りは散らないという病いに抗する決意が示される。3首めの「血にかも散ると」は、広野三郎が解釈しているように血のようになって散るという意味であろう(斎藤1944: 106)。咯血を薔薇にたとえた子規の歌を引用したが、この歌も咯血を想起させる。山茶花の花の色は多様だが、これは赤いものであろう。4首めは、自分の病いの予後がどうなるか分からないうちに、山茶花は散ってしまった、という詠嘆を表す。

4. 旅への帰依、ふたたび歌のわかれ

結核を宣言された1911年(M44)11月21日から亡くなる1915年(T4)2月8日までの間の長塚節の行動で不思議なことがある。それは、この「病中雑詠」から、1914年(T3)6月『アララギ』第7巻第5号に出した47首からなる「鍼の如く 其の一」まで、短歌を全く発表していないことである。では、節はなにををしていたかという旅である。

発病前の節は旅が大好きで、毎年1、2か月は旅行していたという(橋詰1915: 111)。この旅行好きは発病してもかわらず、後に見るように1914年(T3)の夏の宮崎・大分行きのように病気がさうとう進んでいても旅にでていた。

節は、1912年(M45)3月19日に東京を発ち9月15日に帰京する大旅行を行なっている。この長旅で、静岡、名古屋、京都、吉野、京都、岡山、広島、福岡、隈本、鹿児島、長崎、博多、対馬、隠岐、高松等々を訪れている。この間、3月26日に京都医科大学病院に入院し、翌27日に咽喉の患部を「一時に取り去る」という手術を受けている(全集7: 422 父宛書簡)。4月10日に退院し(全集7: 437 橋詰孝一郎宛書簡)、12日には吉野で花見をしている。花は真つ盛りで、蔵王権現の祭典も偶然見た旨を吉野山上一目千本桜の絵葉書に書き、友人の岡三郎に送っている(全集7: 439)。

その後、20日に九州に発つまでに内科で診察を受け、「小生の病氣も差当つては大事も無之様子肺の疾患は漸次薄らぎ肺病に特有のラッセル音」もないと診断されたとある(全集7: 443 渡邊剛三宛書簡)。また、20日に九州に発つことについて、羽根が生えたように感じた」と記している(同)。そして、4月22日には福岡大学附属病院で久保猪之吉博士の診察を受け、「大分よく癒り居る由」伝えられるとともに、鹿児島までの旅行の許可をもらっている(父源次郎宛書簡 全集7: 446)。

この半年にもなろうとする長い旅の目的は、診療を受けることだけではない。名所旧跡の訪問も大きな目的であった。この旅行中、節は全集に収められているだけでも224通もの手紙、絵葉書等々を書き送っているが、病氣について書いている以外に、たとえば、先に見たような吉野の桜や祭典についてのような名所旧跡についての記述も多い。

翌1913年(T2)にも節の旅を希求する心はかわらない。3月14日に東

京を発ち福岡へ向かい、再び久保博士に診察してもらうが、結核の疑いはない、と診断されている。

当地久保博士の診察によれば喉頭には結核の疑だに無之候由、朝の咯痰の検査も致候へ共結核菌も無之心配なしとのことに有之候（渡邊剛三宛書簡 全集 7: 544）。

節は、信頼をよせる久保博士のこの言葉がよほどうれしかったに相違なく、伊藤左千夫、斎藤茂吉、平福百穂らアララギの先輩、友人を含めあわせて8人に報告している（全集 7: 545-548）。たとえば、芥屋の大門の絵葉書に書かれた文を引いておく¹⁴⁾。

いつか石にかちりついても癒れとの御葉書でしたが、幸にも咽頭は全治して居る相です、此を貴下へお知らせすることが何だか義務をはたしたやうな心持がします（佐久間政雄宛絵葉書 全集 7: 547）。

そして、福岡からの「帰途は瀬戸内海を汽船にて遊覧致すことに相叶ひ申すことに相成申候」となる（渡邊剛三宛書簡 全集 7: 544）。晩年の節にとって、5月24日に東京に戻るまでの、門司から神戸まで宮島に寄って瀬戸内海を船で行き、京都、奈良、出雲に遊んだこの帰路はもっとも幸福な時間であったろう。4月5日に宮島から出した斎藤茂吉宛の絵葉書の文面には、節の歓喜が表現されている。

海は生きて光つて居る、世の中はもう花である、宮島も花である、（中略）それだけ病人はもう希望に輝いて居るのである（中略）病人も段々めでたく春になつて来さうである（全集 7: 549-550）

久保博士は、「最初より私の病気に就いては果たして悪性なりしか否かと申すことにも疑問をいだかれ居る」のだったという（3月に書かれた松山貫道宛未投函絵葉書 全集 7: 546）。しかし、節は夏から熱を出すようになり、12月には38度3分の熱を出すにいたる（岡三郎宛書簡 全集 7: 591）。節は当時の最高の診断技術をもった医師たちに診察を受けているの

だが、医学の水準を考えてみればこうした誤診は多々あったと思われる。

この身体の不調と呼応して、節は11月24日から二つめの病状日記を小型の手帳につけ始める。これは、節があきらかに結核を意識したという点で重要な転機である。節は再び結核を生きはじめたのである。この病状日記は、翌1914年（T3）の11月16日まで書き続けられた。11月17日から三冊目に移り、翌1915年（T4）1月8日まで書き続けている。これらの日記にはほぼ毎日検温の結果が記されており、節の几帳面な性格が反映されている。

1913年（T2）12月24日付の郷里の母に宛てた手紙によれば、節はこの日井村医師を訪れ、病気の再発を告げられている。しかし、「只一度機械にてつまみ取ればなくなる由」と説明を受けた、とある（全集7: 593）。母を心配させないため、このように書いたとも解釈できるが、26日の岡三郎に宛ての絵葉書には、この再発について「一昨年とちがつてもうそんなにおどろきません」と記している（全集6: 594）。12月23日、節は茨城から上京し神尾医師の診察を受け（全集4: 323）、26日に神田の金沢医院へ入院する（全集4: 324；全集7: 594）。そして、翌1914年（T3）1月23日、母の病気のため退院し翌日帰京している。しかし、3月13日茨城より上京し、3月14日に今度は橋田病院に入院する（全集4: 340-1）。

節が短歌に回帰するのは、この年の4月である。病状日記の4月6日の記載に「昨夜ふと歌一首成る。十一時半頃より暁に及んで眠らざりし為なり」（全集4: 345）とあり、7日の条には「昨夜よりの歌の添削をなす」（同前、346）と記されている。5月1日、久保博士夫人の久保より江に3枚の絵葉書を書いているが、その一枚には、後に「鍼の如く 其一」に収められる歌「ならの樹のわか葉は白しやはらかにひとへの肌に日はとほりけり」が記されている（全集7: 634）。また、別の絵葉書には次のように書かれている。

私も此病院へ来てからふと少しばかり歌が出来ました、（中略）秋海棠の画賛の歌が只一首あります（同上、635）

5. 「鍼の如く」：最後の歌への回帰

長塚節の短歌の最高傑作とされる 231 首からなる「鍼の如く」は、1914 年 (T3) から 15 年 (T4) にかけて 5 回にわたり『アララギ』に掲載された。1914 年 (T3) の第 7 巻第 5 号 (6 月特別号) に「鍼の如く」(47 首)、6 号 (7 月号) に「鍼の如く (以下、タイトル略) 其の二」(40 首)、7 号 (8 月号) に「其の三」(35 首)、8 号 (9 月号) に「其の四」(39 首)、しばらく間があき 1915 年 (T4) の第 8 巻 1 号 (1 月号) に「其の五」(70 首) で、あわせて 231 首の連作である。

「鍼の如く」全体を見渡してみると、この連作がいくつかの点で特異であることがわかる。まず、詞書が非常に多い。単に日付だけのものも含めれば、231 首の短歌に対して 124 の詞書が付されている。そして、後に引用するように長い詞書も多い。第二の特異な点は第一のそれとかわわっている。「鍼の如く」は長い歌日記なのである。「其の一」の 31 首め、すなわち 1914 年 (T3) 4 月 27 日に作られた「春雨にふれてとゞけば見すまじき手紙の糊もはげて居りけり」から、同年 12 月 8 日の日付がある「朝まだき車ながらにぬれて行く菜は皆白き茎さむく見ゆ」までの 196 首は、7 か月間にわたる歌日記の態をなす。残る 35 首、つまり「其の一」冒頭の 30 首と「其の五」末尾の 5 首は、橋田医院入院中の短歌および旧作を推敲したものである。

第三に、おもに入院中に作っているにもかかわらず、直接・間接に結核についての短歌が少ない。一方で、詞書に「八月一日、病棟の蔭なる朝顔三日ばかりこのかた漸くにつつとさきいづ」といった病気に直接・間接にかかわる記述が多い。先述の分類を用いると、(1)短歌の主題としての病気が現われる、(2)短歌に単語としてあらわれた病気が現われる、および(3)短歌のなかに病気や病名は現われないが、あきらかにそれを想起させる表象が存在する、短歌は少なく、(4)詞書のなかにのみ病気・病名が現われるか、あきらかにそれを想起させる表象が存在すること場合が多い。すなわち、「鍼の如く」では、詞書が重要な役割を担っている。

詞書について、節ははっきりとした意見を持っていた。1914 年 (T3) 11 月下旬に福岡の旅館に逗留していた節を見舞った歌人に、次のような見解を述べている。

歌には是非ことばがきがある可き筈です。之が今の歌には全くない為めに何と歌つてあるか分らないのが多い假令分つても分かるまでに無駄な骨折を読者がしなければならぬ。之に反してことばがきを附くれば作る人も容易にその時々心持を適切に表はす事が出来ると共に読むにも丁度その通りに分かり易くつまり作歌の目的を達するのです（中島哀浪 1915: 154）。

この見解は一般的ではないが、「鍼の如く」では詞書が歌と共鳴しており、節の方法は成功している。

以下、「鍼の如く」から「鍼の如く 其の五」までを順にみていく。47 首からなる「鍼の如く」は、1914 年 6 月 1 日発行の『アララギ』第 7 巻第 5 号（6 月特別号）に発表された。最初の歌は

秋海棠の画に

白埴の瓶こそよけれ霧ながら朝はつめたき水くみにけり

である。これは、先に引いた久保より江への絵葉書で言及されているものだろう。先述のように、「鍼の如く」の 31 首めの、すなわち 1914 年（T3）4 月 27 日作の短歌から歌日記が始まる。「鍼の如く」はさらに「一」から「六」に分けられているが、病いにかかわる歌は最後の「五」の 9 首のうち 2 首を数えるのみである。1 首めは以下の歌である。

薬瓶さがしもてれば行春のしどろに草の花活けにけり

詞書は「五月六日、立ふぢ、きんせん、ひめじおんなどくさへの花もて来てくれぬ手紙の主なり、寂しき枕頭にとりもあへず」となっている¹⁵⁾。

節に手紙をくれた人物が病院まで見舞いに訪れたのである。病状日記によれば、その人物とは婚約を解消した黒田てる子であり、午後 4 時頃にやって来て 9 時まで話して帰った（全集 4: 352）。また、彼女は菓子折りのほか、「きんせん、ひめじおん、をだまき、たてふぢ、牡丹」を持参している（同）。歌の意としては、看護婦が探して持ってきてくれた空の薬瓶に、その

花を活けたというものである。この歌のなかで病気を連想させるのは「薬瓶」という言葉だけであり、それだけでは作中主体が病んでいるかどうかはわからない。したがって、この短歌は先にあげた類型によると、(4)詞書のなかにも病気・病名が現われるか、あきらかにそれを想起させる表象が存在する、にあたる。しかし詞書に病名までは書かれておらず、長塚節が結核であることは知る人のみ知ることである。ただ、この一連は結社誌——結社に参加している者に配付される——である『アララギ』誌上に発表されたものであり、読者の多くはそのことを知っていたはずである。つまり、読者は節が結核にかかっていることを知っていれば、読みが変わる。そのうえに、詞書の「寂しき枕頭」という言葉を読むと作者は病床にあるということが分かってまた読みがかわるといういくつかの読みのレベルがある歌である。

一方、2首めの歌は次のようなものである。

十一日の夜に入り始めて百合のかをりの高きを聞く、此夜物おもふことありける
に明日の疲れおそろしければ、好まざれども睡眠剤を服す、入院以来これにて二
度目なり

うつゝなき眠り薬の利きごゝろ百合の薫りにつゝまれにけり

やはり(4)の歌である。この歌の前の歌の詞書で、「十一日」とは5月11日、そして見舞いに來た者が、鉄砲百合とスイートピーを持ってきてくれたことが分かる。さらに病状日記の5月10日の記載を見ると、見舞い客とは再び黒田てる子で、実際に鉄砲百合とスイートピーを持って来ており、「彼女の帰りし後はいつも心中に泣く」と書かれている（全集 4: 353）。歌の意味は、睡眠薬が効いてきてぼんやりしていると、百合の薫りにつつまれたというものである。

ところで、この頃、節は発熱に悩まされている。5月10日付の平福百穂宛書簡に、次のように書いている。

近頃になつてから兎角に熱が出ます、尤もたいしたことではないのですが、咽喉がどうもいけないのです（中略）神尾の処へ行きました（中略）も一度思ひ切つてそこを取ることにと申します、然しさうなれば久保さんにやつて貰ふ方がいゝのですから、（中略）九州行きを決行しよ

うと思つて居ります（全集 7: 640）

病状日記を見ると、橋田医院に入院した 3 月 14 日以降 37℃台の発熱は稀でなく、38℃にちかくなることもあった。また、5 月に入ってから咳も多くなっており（全集 4: 353）、退院した後も、たとえば 6 月 5 日に「咳嗽やまず」と記しているように（全集 4: 359）、咳に悩まされた。当然この身体の変調が何を意味するかを、節は理解していたはずである。

節は 5 月 29 日に退院し、翌日茨城の実家に戻るが（全集 4: 357）、その直前と直後に門間春雄にそれぞれ次のように書き送っている。

院長（松岡註 橋田医院の院長）はあなたが思ふ程悪くはないんだといつてくれます。近頃精神上に動揺を来すことがあつて困つて居ます、昨今のやうにかう長い間を、悲哀につゝまれて居ることは嘗てないことなのです、只今は自分の病気だけではさう悲しいと思ふことはなく成つて居ます（5 月 26 日付 全集 7: 647）

だが咽頭はなか／＼容易でなくなつて居ると知りつゝ、そのため懊悩するやうなことはちつともありません（6 月 4 日付 全集 7: 650）

他方、黒田てる子が入院中の節を見舞っていたことが、てる子の家人の知るところとなり見舞いどころか手紙のやり取りも禁止されてしまうということがあった¹⁶⁾。これはもちろん大きな出来事であり、5 月 27 日の岡三郎宛葉書には「近日精神に動揺を来すことありて結果おもしろからず困却致居候」とある（全集 7: 647）。しかし、上に引用した 5 月 26 日の手紙にある、長い間の悲哀というのはこのことに拠るばかりではなく、自分の病気が悪くなっているという事実に悲しんでいたのだと思われる。病気はそれほど気にかけていないという内容の文言は、自分に対しての慰めと考えるのが妥当だろう。

「鍼の如く 其の二」は『アララギ』第 7 巻第 6 号（7 月号）に掲載された。5 月 22 日から 6 月 9 日までの 40 首を取める。この間、節は 5 月 29 日に橋田医院を退院したことは先に述べたが、6 月 7 日には博多へむけて東京を発っている。

「其の二」は、「一」から「三」に分けられ、「一」に 5 首、「二」に 1 首、「三」

に1首病氣にかかわる歌がある。「一」の最初の2首は下のような歌である。

五月二十二日、夜こゝろに苦悩やみがたきこと起りて眠遂におだやかならず
小夜ふけてあいろもわかず悶ゆれば明日は疲れて復た眠るらむ
おそろしき鏡の中のわが目などおもひうかべぬ眠られぬ夜は

1 首めの短歌の「あいろ」は漢字では「文色」でもものの区別の意で、「あいろもわかず」は「判断を失って」や「理性を失って」という意味であろう。下の句「明日は疲れてまた眠るらむ」が客観的な描写となっており、状況描写、主観、客観のバランスがとられている。2 首めは、眠れない夜に鏡のなかの自分の恐ろしい眼を思い浮かべ、それによってまた眠れないという意味だろう。この2 首は、(5)歌人が病んでいるということが分かると、その歌が病氣にかかわると判明する、というカテゴリーに入る。

「一」の7、8、9 首めは次のような歌である。

手紙のはしには必ず癒えよと人のいひこすことのしみ／＼とうれしけれど
ひたすらに病癒えなとおもへども悲しきときは飯減りにけり
窓外を行く人を見るに、既に夏の衣にかへたるがおほし
咳き入れば苦しかりけり暫くは襲ねて居らむ単衣欲しけど
藁蒲団に身をいたはることも七十日にあまりたれど、自ら幾何も快きを覚え
頬の肉落ちぬと人の驚くに落ちけるかもとさすりても見し

掲出歌1 首めには、鹿児島寿蔵が指摘するように「限りない悲哀」が感じられる（斎藤 1944: 167）。2 首めは、5 月末で外の健康な人は衣替えをして単衣を着ているが、自分は咳が出ているのでまだ薄い夏の服を着ることができず重ね着をしているという意味である。発熱しているであろうことが言外に読み取れる。3 首めでは痩せて衰弱していく体を、他者が節に知らせ、節自身が頬をさすって実感するという時間と空間が端的に表現されている。

はじめの2 首では病氣が短歌の主題として現われており、(1)の類型に属する歌である。3 首めは、(3)短歌のなかに病氣や病名は現われないが、あきらかにそれを想起させる表象が存在する歌であるということができる。

「其の二 二」には次の1 首がある。

健康者は常に健康者の心を以て心となす、もとより然るべきなり、只羸弱の病者に蒞さむ時といへどもいくばくも異なる処なきが如きものあるを憾みとすることなきにあらず

すこやかにありける人は心強し病みつゝあれば我は泣きけり

(1)の歌である。節にしては珍しく詞書にも歌にも感情を露わにしている。詞書で健康な者は病気の者を究極的には理解できないことを憾み、短歌では泣くという感情的な行為を描出している。この歌と呼応する感情が、1914年(T3) 9月3日の門間春雄宛ての絵葉書に吐露されている。

時々たよりをせよとあなたからいはれた時、私は無然としました、あなたも年の割に老生した人ですがやはり丈夫なんです、(中略)病者でないと病者の心はわからないと、今年に成つてつくし思つたことでした、あなたに不足をいふのではなく、私の苦しさを訴へてお察しを乞ひたいのです、さうして健康者の心より外にしないあなたを羨むのです(全集 7: 692)

さて、この歌と先に引いた「小夜ふけてあいろもわかず」および「ひたすらに病癒えなとおもへども」の3首について、斎藤茂吉は「皆盡く本心を表はしている。本態が出てゐるといふことになる」と評している(斎藤 1925: 68-9)。

6月7日、節は再び福岡へ向けて発つ。静岡、神戸、下関に宿泊して、10日に福岡に着き、20日から8月14日まで福岡大学附属病院で入院生活を送る(全集 4: 359-376)。「其の二 三」の最後、すなわち「其の二」の最後には、前後の歌の詞書から、6月4日から9日(福岡へ行く途中、下関に投宿している)の間に作られた次の歌がある。長い詞書があるが、重要なのでそれもあわせて示す。

暑きころになればいつでも痩せゆくが常ながら、ことしはまして胸のあたりの骨あらはなれど、単衣の袂かぜにふくらみてけふは身の衰へをおぼえず、かゝることいくばくもえつゞべきにあらざれど猶独り心に快からずしもあらず

単衣きてこゝろほがらかににけり夏は必ずわれ死なざらむ

夏には死なない、という言い方がかえって自らの死期が近づきつつあることを作者が意識していることが示されていると考えられる。この歌についてアラギの歌人たちが、「詞書と共に味はうべき歌である」と論じているように(5)の類型の歌である。(斎藤 1944: 195)、

『アラギ』7号(8月号)に掲載された「鍼の如く 其の三」(35首)は、6月9日から7月7日までの短歌がまとめられており、「鍼の如く」と「鍼の如く 其の二」にあったさらなる区分はない。病いに関係する歌は2首のみである。詞書から6月17日から20日の間に作られた1首めは以下のとおり。

病室みな塞りたれば入院もなり難く、久保博士の心づくし暫くは空くして雨にぬれて通ふ

すみやけく人も癒えよと待つときに夾竹桃は綻びにけり

「人も癒えよ」とあるが、これだけでは誰が病んでいるのか分からず、(5)の類型に入る歌である。

一方、2首めの7月4日の歌は「四日深更、月すさまじく冴えたり」の詞書のあと1首をおいて、

小夜ふけて竊に蚊帳にさす月をねむれる人は皆知らざらむ

これより前の歌の詞書に「廿四日夜、また不眠に陥る」とあり、三浦義晃にあてた絵葉書にも、「ここでも暑い〜でねられぬ晩があります」と書いている(全集 7: 677)。また、7月3日には父に「当地はなか〜の暑さにて夜分八十六度位のことも有之病室はなか〜苦しく候へども(後略)」と書き送っている(全集 7: 666)。華氏 86 度は摂氏 30 度であり、たしかにかなり暑い。これも(5)の歌である。

8号(9月号)に掲載の「鍼の如く 其の四」は、7月17日から8月6日までの短歌39首よりなり、「一」から「三」に分けられている。病にかかわる短歌は1首のみである。

朝のうち必ず一しきりはげしく咳出づることありて苦しむ
曉の水にひたりて鳴く蛙すずしからむとおもひ汗拭く

「汗拭く」の原因は、はげしい咳なのである。歌のなかで咳についてはまったく触れられていないので、詞書がなければ夏の暑い朝の歌と読めてしまう。しかし、詞書を読むと、汗をかくほど激しい咳をしていたのだということが分かる。作者が結核を病んでいたことを知っていた場合でも、詞書がない場合とある場合でこの歌の解釈はずいぶん異なってくる。(4)の歌である。

「鍼の如く 其の五」(70首)は1915年(T4)の第8巻1号(1月号)に発表された。「一」から「四」に分けられている。1914年(T3)8月14日に福岡大学病院を退院すると、16日には福岡を発ち18日に宮崎の青島に至る。その後宮崎県内を旅し、8月6日には青島に戻る。「其の五」から以下に引く短歌はすべて、詞書に病いについての言及があるのみであり、(5)の範疇に入る。

六日、波荒き海上を折生迫の漁村にもどる、此の夜おもひつづくることありてふ
くるまで眠らず
草に棄てし西瓜の種が隠りなく松虫きこゆ海の鳴る夜に

9月22日には博多に戻り、次の歌を作っている。

二十二日、博多なる千代の松原にもどりて、また日ごとに病院にかよふ
此のごろは蜩々と呼ぶ声もすずしく朝の嗽ひせりけり

「日ごろは熱たかければ、日ねもす蒲団引き被りてのみ苦しかる程に(後略)」という詞書を持つ10月18日の歌は以下のとおりである。

浴みして手拭ひゆる朝寒みまだつぼみなりそのあさがほは

また、11月14日には、「俄に九度近くにのぼりたる熱さむることもなく、三十日ばかりの間は只引きこもりてありければ(後略)」という詞書がある

次の歌を作っている。

吸物にいさゝか泛けし柚子の皮の黄に染みたるも久しかりけり

この歌の詞書にとあるように、10月頃から病状が悪化している。節は故郷にも東京にも戻ることなく、1915年（T4）1月4日には福岡大学附属病院の隔離病棟に入院し（弟宛書簡 全集7: 752）、2月8日に死去している。

6. 救済としての旅、そして短歌

晩年の節にとって、旅と短歌はどのような意味を持っていたのだろうか。節が自分の病いの予後についてどのように捉えていたかを手掛かりに、この問題を考えてみたい。

斎藤茂吉は、次のようなエピソードを明らかにしている。

長塚さんは病気になってから、もう読む折もないだらうといつて、代匠記、賀茂真淵全集、本居宣長全集の類を盡く僕に譲つたのであつた。それから、「土」の第一草稿と、新聞社に送った「土」の原稿全部、旅行用小手帳数冊、合版雑記帳二冊、農作おぼえ書数葉などは晩年に僕に呉れたのであつた（斎藤 1925: 72）。

「晩年」は、1914年（T3）を指すのであろう。まだしばらくは死なないだろうと思っている者が、歌人にとって重要な書籍や自筆の小説原稿を他人に与えるだろうか。節は、もうそう長く生きることはできないと考えていたに違いない。しかし、同時に節は結核が治癒することにかすかな望みをいだいていた。

そのひとつが久保博士の治療である。1914年（T3）5月1日付の絵葉書に、節は「三度も久保博士をたよつて行つてそれでいけなければもうそれまでゝあります」（胡桃澤勘内宛 全集7: 637）と書いている。ここまで久保博士にこだわったのには理由がある。それは博士が「懸垂咽頭検査法」なる方法で咽頭を見て、患部を焼くという治療を行なっていたからである。この電気焼灼という治療法は、「久保博士が独逸留学中の先生にて只今世界第一

の大家キリヤン教授の考案」で（父母宛書簡 全集 7: 668）、「此法を能くするもの現今日本に久保博士只一人のみ」なのだという（橋詰孝一郎宛書簡 全集 7: 673）。久保博士夫人の久保より江は、大学病院への 1914 年（T3）8 月 23 日以降の長塚について、「よほどやつれて元気がなくなつていらつしやいました」として、次の旨記している。節にとって博士に喉を焼いてもらうのが唯一のなぐさめだったのだろう。焼けばなおると信じているのが気の毒だと久保博士は話していた、と（久保 1915: 120）。

6 月福岡大学附属病院へ入院した節について、久保博士の部下西巻医師は、次のように記している。

長塚さんには外の患者にまゝ見る様に病気を悲観して居られる様には見えなかった、いつまでも治療といふことに希望を抱いて生き生きとした気分でご居られた、従つて実に根気がよかつた（西巻 1915: 140）。

節が病気について楽観的に捉えていたというこの西巻の理解は、節の病いに対する一面は捉えているだろう。しかし、節は楽観的であつただけではない。やはり久保博士門下の曾田医師は、同じ 6 月の節について以下のように証言している。

（節が）たしかに死にたくなかつたらしい風で「もう十年生きたい」は毎度聞きました。そして書きたいと思ふ小説の材料を幾つも幾つも話されました。そんな時には医師や周囲の人が見離したような病人が全快したといふような例を並べて自分で安心するという風でした（曾田 1915: 138）。

先に「鍼の如く 其の三」から「単衣きてこゝろほがらかにになりけり夏は必ずわれ死なざらむ」を引いたが、このエピソードにも自分は死なないんだと言い聞かせて安心しようとしているという様子が見て取れる。

これまでみてきたように、1911 年（M44）11 月 21 日結核の診断以来、節は旅をくり返している。1912 年（M45）4 月に初めて福岡で久保博士に診察してもらっているが、その後も毎年福岡を訪れ福岡大学附属病院を受診している。当時の交通機関の状況を鑑みれば、東京から福岡へ向かう旅は体

力をかなり消耗させたことは疑いない。しかし節は旅をやめなかった。

堀口は、病跡学的アプローチによって長塚節の強迫性を明らかにしている（堀口 2008）。節は強迫的に久保博士の治療を受けていたが、旅も強迫的に希求していた。節にとって最後の旅は、8月16日から9月22日までの福岡から宮崎、大分への旅である。

この旅は、転地療養としての意味も持っていた。6月28日、入院中の福岡大学附属病院の病室から宮崎の知人に宛てて書いた書簡には、宮崎の青島で「砂にくるまつて日光浴をやつたら私の身体には格別宜しからうと思ひます」と記している（全集7: 661-2）。また、7月16日の書簡にも、青島への転地を考えている旨の記載がある（橋詰孝一郎宛書簡 全集7: 673）。

ところが、青島では8月19日から9月7日の間に、3軒の旅館から肺病ではないかと疑われ追い立てられている（9月7日付、門間春雄宛絵葉書 全集7: 691）。つまり、この時には、おそらく咳や顔色や痩せていること等々で、医療に携わる者でなくとも節が結核を病んでいるのではないかと思うまでになっていたのだ。この屈辱的な経験を「発病以来はじめて心にしみへて見ました」と8月24日に久保より江に書き送っている（全集7: 691）。

9月3日、節は絵葉書を6枚書いているが、自分の体の具合について言及している3枚を引く。

日向は私のために幸福な処ではありませんでした、それで熱が出ては気分が悪いからだですけれど、舟車の便をたよりに南へ――と志してきました、景色はいゝ処で結構です、もう少し南へ行かうと思つています（門間春雄宛絵葉書 全集7: 692）

もう少し南へ行かうと思つています、然し病体ですから不自由でいけません（斎藤隆三宛絵葉書 全集7: 694）

先月中旬日向へ立つたのですが、何分にも気分が悪いし随つて何事も億劫ではあり、（中略）海の景色がいゝので今少し南へ行かうかと思つています（胡桃澤勘内宛 全集7: 695）

体調がかなり悪いことは節自身にも明かだった。節は、南の日に当たればいくぶんか病氣もよくなるのでないか、と考えていたように思われる。節の

二つめのかすかな望みはこの南への旅である。結果的に体力を消耗させ結核を悪化させたこの旅への熱情は、しかし、節にとっては救いであったと考えることができる。

では、短歌はどうだろうか。これまで検討したように、発病後の節の歌で直接病いを詠んだものは決して多くない。節は、詞書に病気のことも含めて自らの日常を記し、短歌ではなるべく病気について触れないという方針をとった。そして、節が短歌を作ったのは、1911年（M44）11月の咽頭結核の診断から入院をへて2月20日に退院するまでと、再び体調が悪くなった1914年（T3）5月から12月までである。つまり、死を意識して生きたに相違ない時期と重なっているのだ。

「鍼の如く」を作っていた1914年（T3）について、「ことしに成つて半ば頃から私にも不思議に歌ができます」と節は書き残している（10月17日付、中岫つや子宛 全集7: 721）。また、7月16日には次のように書いている。

ことしはからだが悪く成りつつあるので困ります。それでも三年以来中絶の歌は復活といふよりも、新生涯に入つたやうな気がします（橋詰孝一郎宛書簡 全集7: 673）

ここで、「鍼の如く」といういささか奇妙なタイトルについて考えてみたい。鹿児島寿蔵は、「病床雑詠」のなかの「山茶花よそをだに見むと思へるに散らなくあらな我が去ぬるまでに」という歌を評して、「心が、眼が、やさしく輝いてゐると共に益々針のようになつてゆく心情が窺へる」と述べている（斎藤 1944: 107）。この文言はいうまでもなく「鍼の如く」のタイトルを意識したものである。では「益々鍼のようになつてゆく心情」とは、いったいどのようなものだろうか。咳嗽や発熱の苦痛や不快感ゆえに、そしてまた同時代の数多の結核患者たちの死ゆえに、節は死を意識して生きることによって心が鋭敏になっていく。しかし、取り乱さずに抑制が効いた冷静な短歌を作る。これが「鍼の如く」の意味するところだろう。

そのような鋭敏な感覚にもとづく創作性は、短歌という形式で開花する。先に西巻医師に対して、節が書きたいと思う小説の材料をいくつも話したというエピソードを紹介した。最初の咽頭結核の診断と再発の後、小説は書き

たいが書けないことを明確にはっきりと意識した節は、自分では意識しなかったが短歌へ向かったと考えることができる。歌の「新生涯」は、そのように形作られたのだ。

エルズリッシュとピエレが指摘するように、「結核は、とりわけその罹病期間が長いので、死の一形式であるよりも生の一形式」であり、「結核による死は、個人的でかなり緩慢なもの」だ（エルズリッシュ、ピエレ [1991] 1992: 58）。結核という慢性病を生のひとつの形式として、節は、詞書と短歌とが共鳴する独自の様式をつくりだしたのである。土屋文明は、「鍼の如く」を「転機の賜」であるとする（斎藤 1944: 65）。結核が転機とした生の希求と近づく死という二つの逆方向へ向かうベクトルのなかで短歌を作るという営為は、節にとって救いなのであった。

注

- 1) たとえば、青木純一『結核の社会史』第8章「療養者の言葉と生活」(2004)、エルブリッシュ、ピエレ『病人の誕生』([1991] 1992)。
- 2) 『ハンセン氏病文学全集』(第1期全10巻、皓星社)『第8巻 短歌』(2006年)には、約1,200人の短歌20,000首が収められている。
- 3) 瞬時に短歌や俳句を詠むことは、それぞれ「即詠」「即吟」と呼ばれ、訓練としても活用される。1900年(M33)3月30日、節が二度目に子規を根岸庵に訪れた折、子規は線香一本が燃え尽きないうちに、根岸庵の実景を歌に詠めと命じ、節は「歌人の竹の里人おとなへばやまひの床に絵をかきてあり」をはじめ10首を作っている(橋田 1925: 87-88)。また、俳句結社〈軸〉の主宰であった河合凱夫(1921-1999)は、マッチ一本が燃え尽きる間に一句つくらせるというトレーニングを、時に門人たちに課した。
- 4) 以下、歴史的文献から引用する場合、正字は新字とし、ひらがなは旧かなのままとする。
- 5) 医師で歌人であった上田三四二は、この一連を「子規一代の傑作」とし、また「これほど子規らしくない作品も稀」であるとしている(上田 1959: 15-16)。
- 6) 呼吸は肺呼吸と皮膚呼吸に分けられるが、一般に「呼吸」は肺呼吸を意味する。本稿でもこの用法を用いる。
- 7) 長塚節の生涯については、以下の文献を参照した。『新小説 長塚節追憶号』30(12)、『アララギ 長塚節追悼号』8(6)、斎藤茂吉編『長塚節研究(上)(下)』東京：筑摩書房(1944)、大戸三千枝『長塚節の研究』東京：桜楓社(1990)。
- 8) 弟の長塚順次郎は次のように追想している。「今で云う神経衰弱ですね、ずい分弱って夜半に眠れない始末です」(長塚順次郎 1925: 74)。
- 9) 「再び歌よみに与ふる書」(1898年2月14日新聞『日本』掲載)は以下の有名な文で始まっている。「貫之は下手な歌よみにて古今集はくだらぬ集に有之候」。
- 10) 長塚節全集(東京：春秋社、1976-78)からの引用は、(全集 巻数 ページ)で、たとえば(全集6: 323)のように記載する。
- 11) 岡籬(1877-1951)は本名三郎で、書家でアララギの歌人。
- 12) 節の「病床日記」12月10日の条に「左千夫、茂吉、中村憲吉君来る」とある(全集4: 257)。
- 13) 『アララギ』の目次には「我が病」とあるが、本文にタイトルはなく詞書から始まっている。長塚節の短歌の引用は、すべて『アララギ』初出に拠る。
- 14) 芥屋の大門(けやのおと)は、福岡県糸島市の糸島半島の北西の大門岬にある高さ約64m、間口10m、奥行き90m 浸食洞、日本三大玄武洞の一つ。長塚節の九

州旅行については別に論考を予定している。

- 15) 土屋文明は、「立ふち」はルビナス、「きんせん」は金盞花、ヒメジヨンの花は夏に咲くのでこの「ひめぢをん」はシラネリアであろうとしている（斎藤 1944: 155）。
- 16) この経緯は、東大分院に勤務していた黒田てる子の兄黒田昌恵宛書簡（5月27日付）に詳しい（全集 7: 647）。

引用文献

- 青木純一 2004:『結核の社会史』東京、お茶の水書房。
- 上田三四二 1959:『アララギの病歌人』東京、白玉書房。
- エルズリッシュ、クロディーヌとジャンニーヌ・ピエレ [1991] 1992:『病人の誕生』（小倉孝誠訳）東京、藤原書店。
- 久保より江 1915:「長塚さん」『アララギ』第8巻第6号、116-121頁。
- 斎藤茂吉 1925:「長塚節の歌」『新小説』第30巻第12号、65-72頁。
- 斎藤茂吉（編）1944:『長塚節研究（下）』東京、筑摩書房。
- 清水房雄 1984:『鑑賞長塚節の短歌』東京、短歌新聞社。
- ソントグ、スーザン [1978] 1982:『隠喩としての病い』（富山多佳夫訳）東京、みすず書房。
- 高崎義行 1915:「入院前後の長塚氏」『アララギ』第8巻第6号、142-144頁。
- 橋田東声 1925:「節の子規庵入門」『新小説』第30巻第12号、85-90頁。
- 橋詰孝一郎 1915:「思ひでのかず／＼」『アララギ』第8巻第6号、111-115頁。
- 福田真人 1995:『結核の文化史：近代日本における病のイメージ』名古屋、名古屋大学出版会。
- 長塚順次郎 1925:「家兄の思出」『新小説』第30巻第12号、72-77頁。
- 長塚節 1976-78:『長塚節全集』東京、春秋社。
- 中島崑浪 1915:「長塚節氏を憶ふ」『アララギ』第8巻第6号、152-156頁。
- 中村憲吉 1925:「長塚さんの思出」『新小説』第30巻第12号、100-108頁。
- 西巻透三 1915:「外来通院中の長塚氏」『アララギ』第8巻第6号、140-142頁。
- 2008:「長塚節の強迫性」『日本病跡学雑誌』第75号、5-18頁。
- 平瀬泣崖 1915:「長塚さんのこと」『アララギ』第8巻第6号、147-150頁。

松田修 1980 : 「銀器鏘然」 『現代歌人文庫④中城ふみ子歌集』 東京、国文社、142-153 頁。

Young, Alan 1982: “The Anthropology of Illness and Sickness.” *Annual Review of Anthropology* 11: pp. 257-285.

Passion and Quietude: How Nagatsuka Takashi, a Tanka Poet, Lived with Tuberculosis

by Hideaki MATSUOKA

Nagatsuka Takashi (1879~1915) is best known as the author of *Tsuchi* or *The Soil* (1910), a novel which depicts the everyday life of poor farmers. However, he had been a tanka poet long before he started writing novels. He left many excellent tankas but the most prominent ones were written during the period from when he was diagnosed tuberculosis at the end of 1911 to December, 1914, two months before his death.

There still remains some mystery why he did not make any tanka for two years, from March 1912 to March 1914, during the three years of his fighting against his illness. This question might be answered by examining his life more closely. Throughout his life, Nagatsuka had a passion for travel and this passion was increased by his illness. There was a doctor in Fukuoka who was the only one at that time who was able to give patients a special treatment that he had brought from Germany. Nagatsuka traveled to Fukuoka, a city 550 miles west of Tokyo three times in his last three years. To receive treatment was, however, not the only reason for his journeying. Before and after staying in Fukuoka, he visited several sightseeing places, such as Kyoto, Nara, Hiroshima etc., and sent many letters to his friends. This passion for travel could have hastened his death as long trips like these at that time could have drained his bodily strength.

There is a sharp contrast between Nagatsuka's travel and tanka. In the field of tanka, his work is noted for its quietude. In 1912, he published two series of tankas: *Waga Yamai* or *My Sickness* and *Byosho Zatsuei* or *From My Sickbed*. After two years of being away from tanka, he returned to this traditional Japanese poetry form and published 231 tankas entitled *Hari no Gotoku* or *Like a Needle*. Usually, tankas written by those who are ill tend to be sentimental, but Nagatsuka's tankas seldom refer to his illness. Instead he

depicted his everyday life including his illness in the *kotobagaki*, the one or several sentences immediately preceding a tanka, which explain the context to that particular tanka.